

エッセイ

私の人生

徳増 公明

第四章

巻頭言（日本ムスリム協会会報より）

アル・イスラーム
AL-ISLAM

الاسلام

第192号

Dhu al-Qa'ada 1436H
平成27年/2015年7月 発行

ラービタ事務総長一行(五反田のイスラーム文化交流会館内)
(2015年/平成27年4月11日)



宗教
法人 日本ムスリム協会

巻頭言

宗教対話

会長 アミン 徳増 公明

4月9～10日、六本木のグランド・ハイヤット東京において「ムスリムと日本の宗教者との対話」会議が開催された。この会議は2年ほど前、マッカの世界イスラーム連盟(ラービタ)から当協会に対し、世界平和を模索するために日本の宗教者と対話したいので協力して欲しいとの要請が寄せられたことが発端であった。協会としてはこの重要性とその実効性を考慮し、宗教者の国際会議の経験が深く、しかも運営に長けている、協会がメンバーになっている世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会に協力をお願いし、実現することができたものである。世界平和を脅かしている自然環境の破壊、核兵器の拡散や多発する紛争・テロ行為等、地球規模の大きな問題は、一民族、一国家、一宗教では決して解決できないことから、世界の宗教者たちが危機感を抱き、みんなで協力してその解決の道を見出そうとする試みでもあった。

イスラームを知りたい日本人宗教者と、神道や仏教を中心とした日本の宗教を知りたいイスラーム諸国のムスリムが宗教の壁を越えて、平和を求めて率直に対話することは大変意義深いことであった。言うまでもなく、宗教は人間生活の基盤となっていて、お互いを知るにはお互いの宗教を知ることが求められるからでもある。

会議は順調に予定通りに終了し、平和を模索する共同声明(25ページ参照)を発表することができた。会議には約300名の宗教指導者や学者が参加し、新聞やテレビでもこの会議を取り上げたので、国内外の多くの人たちに平和のメッセージが届いたと思う。後日、当協会には会議の成功に貢献したとして、共催者であるラービタとWCRP日本委員会から感謝状が届いたが、寧ろ我々が両共催者に対して感謝したく思う。それは協会活動の目的の一つでもある、正しいイスラームの理解を人々に伝える活動として大変効果的であったからである。

يَا أَيُّهَا النَّاسُ إِنَّا خَلَقْنَاكُمْ مِنْ ذَكَرٍ وَأُنْثَىٰ

وَجَعَلْنَاكُمْ شُعُوبًا وَقَبَائِلَ لِتَعَارَفُوا

「人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。」

(クルアーン 49章/部屋章 13節)

巻頭言

会館活動のスタートに向けて

会長 アミン 徳増 公明

日本ムスリム協会の長年の悲願であった新しい「日本イスラーム文化交流会館」が、この度、リフォーム工事を済ませ、年内に誕生することになりました。

思えばこの事業は協会創立60周年記念事業の一つとして2003年に理事会で決議され、スタートしました。それ以来、協会内部で少しずつ資金調達を続け、会館設立基金を設け、一般に資金調達を開始しました。そして会員はじめ会員以外の人たち、イスラーム諸国の政府や慈善団体からの暖かい援助をいただき実現するものです。この事業に賛同し協力して下さった数多くの人たちに、ここに、心から感謝の意を表します。

さて、これからはこの会館を如何に有効活用していくかの対策委員会を設置し、運営を進めてまいります。幸い会館は都心で交通の便が良い場所にあり、様々な活用方法が考えられます。

私がイスラームに入信した50年ほど前に比べて、世界のみならず日本国内の人々のイスラームに対する関心は大きく変わりました。その要因のひとつは、この半世紀のあいだに資源と人口に恵まれた、植民地状態にあった多くのイスラーム諸国が経済的、政治的に著しく成長したからだと思われまふ。日本を始め、各先進国もこのようなイスラーム諸国の力を無視できなくなり、特に国の経済を貿易に依存している日本は人口が多く経済成長を続けているイスラーム諸国との良好な関係を重視せざるをえません。

そのためにもイスラーム諸国の人々との相互理解を深め、信頼関係を樹立することが不可欠なのです。そして、彼らを理解するためには、彼らの生活と人生観の基盤であるイスラームを理解する必要があります。

2020年の東京オリンピックに向けてイスラーム諸国から多くの人たちがこの会館を訪れることになるでしょう。また様々な文化や宗教に関心を持つ多くの日本人も訪れることになるでしょう。国際文化交流のみならず国際人的交流の場所になることも期待されます。こうした活動を通して日本社会に貢献したいとも考えています。もちろん、この会館は会員はじめムスリムのためのものであり、イスラームを学ぶ場であり、信仰を高める場でもあります。

これからの会館の運営・活動において、まだいくつかの課題もありますが、会員の皆様の協力により、それら乗り越え、日本におけるイスラーム・メッセージの発信の地として、国内外から信頼を寄せられるイスラーム団体になるよう、全力を尽くしてまいります。会員各位の御協力を切にお願い申し上げます。

مَنْ بَنَى مَسْجِدًا بَنَى اللَّهُ لَهُ مِثْلَهُ فِي الْجَنَّةِ

「アッラーのために masjid を建てた人には、アッラーはそれと同じものを天国に建てて下さるだろう。」(フハーリー、ムスリムの真正集に収録された伝承)

巻頭言

会長 アミン 徳増 公明



自然は本当に美しい。今年も我が家からほど近い目黒川沿いに800本の桜が見事に咲きそろう、ひとびとの目を楽しませてくれる。花が咲くと幸せな気持ちになるのはどうしてだろうか。花の美しさはアッラーからの恩恵の一つであり、感謝の念をもって、この美を鑑賞したいと思う。アッラーは人類が幸せに生きるための智慧と欲望を与えた。このような自然の美しさは私たちの欲望を満足させてくれる。アッラーから与えられた智慧を絞り欲望をかなえて、幸せに生活を営むことは大切であるが、当然、アッラーから啓示された法を超えるほどであってはならない。このことを忘れ、アッラーの意思に反した行動にでるならば、自然は破壊されるだろう。美しい自然は怒りに変貌し、人類を困難な目に合わせるだろう。今日の世界は経済を優先するあまり、この法

を超えようとしていないだろうか? 近年目立って発生するようになった天災や異常気象は、ひょっとしたらその結果ではないだろうか? 核武装拡大や原発推進は法を超える代表的事例なのではないだろうか? 私たちは民族、国家を越えて、みな小さな地球の一員として、アッラーの意思に従って謙虚に生きていかななくてはならないのだ。

「あなたがた信仰する者よ、アッラーがあなたがたに許される、良いものを禁じてはならない。また法を越えてはならない。アッラーは、法を越える者を御愛でになられない。」(クルアーン第5章、食卓章87節)

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَحْرِمُوا طَبِيبَتِ مَا أَحَلَّ اللَّهُ لَكُمْ
وَلَا تَمَسُّوا رَبِّاتِ اللَّهِ لَا يَحِبُّ الْمُعْتَدِينَ ﴿٨٧﴾



巻頭言

会長 アミン 徳増 公明

日本イスラーム文化交流会館設立記念式典を迎えて

今回の会報は会館オープニング・セレモニー特集とした。会館設立は、現在の私たちのみならず諸先輩がずっと夢見たものであった。そして、ここまで辿り着いた道のりには長く大変厳しいものがあつた。

協会は2003年に創立50周年を迎えた。これを記念に、計画された礼拝所を有するイスラーム文化会館設立事業は、まず資金集めのおおもとになる基金を立ち上げることから始まった。しかし資金調達に努力したものの、都心に不動産を手に入れることは、協会の財力では困難であった。それでも幸いなことに国内外の暖かな支援、会員諸兄の深い理解と協力があつたからこそ、この会館が誕生したのである。

8月8日会館設立記念式典が国内外の関係者約80名を招待し開催された。この事業に協力してくれた方々に感謝の意を伝えるため、また開館を公表しこれからの活動参加を人々に呼びかけるためでもあつた。

式典は事前の綿密な準備もあつて予定通りにうまく進めることができた。参加した各界代表者の方々からも祝辞と共に期待と励ましの言葉をいただき勇気づけられた。小池新都知事からも、会館開設のお祝いと「貴会の活動が日本とイスラームの橋渡しとなりますことを祈念致します」との祝電が届いている。

今後は、この立派な会館をいかに運営・維持・管理し、有効利用していくかが問われるのである。

私たちにとって、美しい礼拝所ができたこと、ムスリムと非ムスリムの文化交流の場ができたことは大変嬉しいことだ。文化交流を通し、非ムスリムに正しいイスラームの姿を伝えることは、同じ共同社会に住み暮らす私たちにとって重要なことだ。日本とイスラーム諸国との友好親善を促進続ける場所にもしたい。精神的なやすらぎを得られる場所にもしたい。

会館の活動は徐々に進めていこう。9月9日から金曜合同礼拝がスタートした。イマームはイスラーム諸国で長年学んだ会員たちがそれぞれ、職場の勤務時間を調整しながらボランティアで交代に務め、日本語で説教する。それをインターネットで中継し、世界に発信されることによって、大勢の人たちが関心を持って見る機会にもなるだろうし、これは日本のイスラーム史に記録されるものになるであろう。また10月からは一般に公開しイスラーム関連の語学や教養講座が連日のように開催される予定だ。

最近、国内においてイスラームに関心を持つ人々が増えている。理由の一つは、経済界においても近年に著しい経済的發展を遂げ、多くの人口を持つイスラーム諸国との関係強化を無視できなくなったからであろう。このような状況において、会館で私たちが果たす役割は大きく、社会に貢献もでき、同時にイスラームのイメージ・アップにつながっていくことをひたすら願っている。会員各位のたゆみない協力をお願いする。

会館の実現を導いてくださった至高なるアッラーに感謝申し上げます。また協力していただいた皆様に感謝申し上げます。

「アッラーのみ使い(平安あれ)が言われた。(アッラーに喜せられんことを願って)マシッドを造った者に対して、アッラーは、天国でそれと同じものを彼のためにお造りになる」(ハディース・ムスリム)

日本ムスリム協会会報(第195号;2016年11月)

巻頭言

対話で平和な年に

会長 アミン 徳増 公明

古来より社会の変革に政治家が大きく関与したことは歴史的にも事実である。先のアメリカ大統領選挙では、米国民は「アメリカ・ファースト」で国益優先の保護政策を主張するトランプ氏を大統領に選んだ。その彼が就任早々に連発する大統領令に、世界は注目している。軍事を含め政治的にも経済的にも、それだけアメリカの影響力は世界的に大きいということであろう。アメリカはここ数十年にわたって自由と民主主義の名の下に、強力な軍事力と財力を用いて一元的金融資本主義社会の形成に邁進し、大国の一極的なグローバリゼーションの加速によって、世界中に経済的格差や生活の格差などの社会問題を生んでしまった。

他の先進国も、あたかもこれを見習うかのように自国中心の保護政策に転じようとしている。これでは一層世界的な社会的問題を多発させ、相互の争いを激化させ、ついには核にまで手を出すような危険性をはらませてしまうだろう。

世界平和の実現を、このような国益優先を目指す政治家に託すことは到底無理なことであろう。そこで肝心なことは、かれらを選出する大衆の良心を正しく呼び起こすことである。そしてそれができるのは宗教指導者であり、またそれが宗教指導者にとって重要な役割であり、使命であると思うのである。いかなる宗教も、人類の幸せと健全な社会の実現を目指している。宗教指導者は宗教、国境、人種の違いを乗り越えて団結し、人びとを正しい方向に導くことができると信じている。

折しも今年の8月には、比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が世界の諸宗教指導者多数を集め、比叡山で開催される。参集者が共に祈り、議論した平和のメッセージを、世界各国の政治家は勿論のこと諸機関に発信するのである。国境を乗り越えて世界平和のため、武力に拠らない対話を平和の武器として積極的に行い、問題解決に邁進して欲しいと切に願うものである。

「人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである」(クルアーン49章13節)

「寛容にして和解する者に対して、アッラーは報酬を下さる」(同42章40節)

日本ムスリム協会会報(第196号;2017年5月)